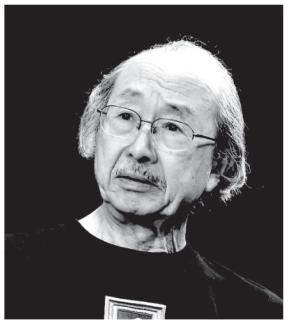
閑話休題

回顧：海を渡って“半世紀前のNY赴任”⑤



西　山　慈　恩＊

前回は1968年の春過ぎに家内の呼び寄せが実現した頃までのことであった。

今回は二人でのNYでの暮らしが始まってからのことになる。

NYの春は東京からはおおむね一か月遅れだから，家内の来た5月はどこに行っても新緑と花が一杯で美しかったが，週末に最初に出かけたのはサークルラインでの観光であった。

マンハッタンの43番街を西に行ったところにあるハドソン川沿いのPier（桟橋）から出て南下し，かつてヨーロッパ方面から船で到着した移民の入国審査場のあったEllis島，その近くにあるthe Statue of Liberty（自由の女神像）のそばを回遊してイーストリバーを北上，つり橋で見事なブルクッリン・ブリッジの下を抜け，更にManhattan Bridge，Williamsburg Bridgeを抜け左手に国連ビルを見ながら更に北上，マンハッタンとBronxを隔てるHarlem Riverを抜けてハドソン川に戻り，NYとNJを結ぶGeorge Washington Bridgeの下を抜け，南下して出発したPierに戻るもので，約2時間のボートでの観光であった。現在では，Full barも設置されている一部三階席もある二階建ての大きなCruise船が運航されているようだが，当時は50人乗り位の屋根のないBoatであった。今，地図を見ながらその航路をたどってみるとEllis島と自由の女神像の近さに改めて気付く。長い船旅を経て，自由の国アメリカに到着した移民が入国を許されるまでに島から目にした自由の女神像を通して，これからのアメリカでの己の人生にどんな期待をかけたのか。すべての米国人がそうではないものの，移民に否定的でアメリカ・ファーストを主張する人々のいる今の米国を思うにつけ，時代の変化を思わざるを得ない。

＊　丸紅株式会社（定年退職）　J.Nishiyama　連絡先E-Mailアドレス：jion13381008nishiyama@gmail.com

(1968年当時。サークルライン観光の船上からみたマンハッタンの南端。2001,9,11のテロで破壊されたWorld Trade Center（ツイン・タワー）もいまだ建設されていない。現在はツイン・タワーの跡地にFreedom Towerと呼ばれるOne World Trade Centerが建っているから，言わば二昔前の写真になる。)

初秋を迎え暮らしにかなり慣れてきた頃，車でのナイアガラの滝への旅をした。

今思えばどうしてそんな無理な行程としたのか，理解に苦しむが，一泊二日であった。

Interstate Hwy（高速道路）を使ってとにかく走り続ける旅だった。

往路は，Albany, Utica, Syracuseを経てナイアガラの滝のあるBuffaloに向かったもので，今，ロードマップでその距離と所要時間を見てみると，458 Mile (733 km)，9時間となっている。

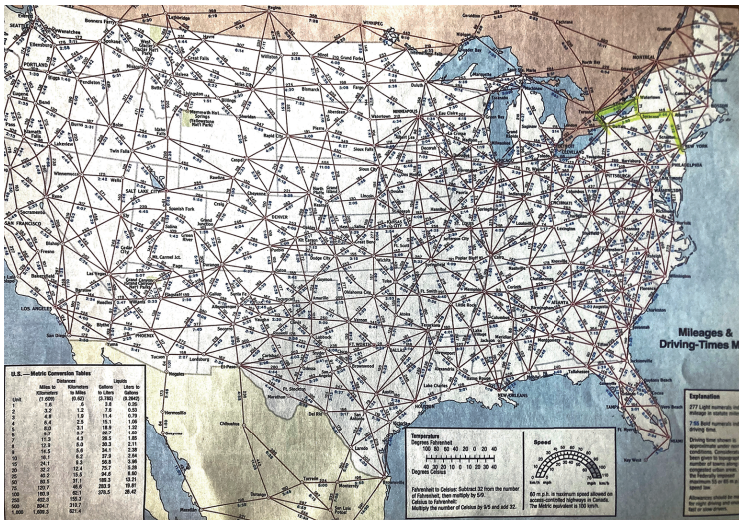
所要時間は当時の高速道路での最高制限時速60 Mile (90 km) での計算である。途中での休憩や食事の時間を考慮すれば，遠距離を走るプロのトラック運転手でもない者には，そもそも無理なものだと今は分かるが，当時は経験のないことから，それを無理とも思わなかった。

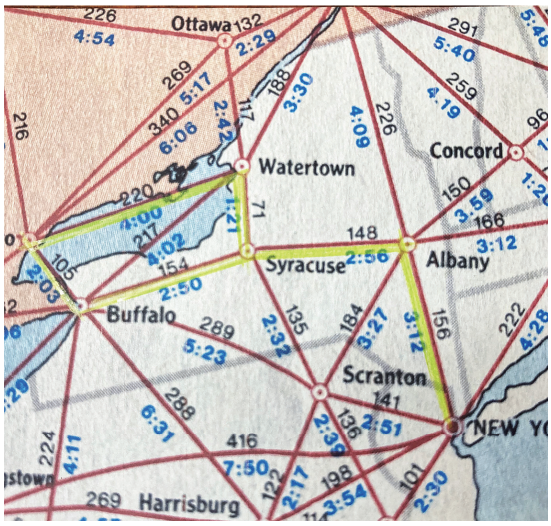
住んでいたQueens区のFresh Meadowsから，美しいWhitestone Bridgeを渡ってBronxを北上し，ハドソン川に架かる長いTappan Zee Bridgeを渡り，Interstate Thruway 87番を北上する車の中での家内との会話は，これから目にするナイアガラの滝への期待，中央の緑化されている緩衝地帯を挟んで片道3車線という素晴らしい高速道路でのドライブに弾んでいた。

記憶が定かでないが，昼食はRest AreaでのHaward Johonsonでなかったかと思う。今はこの種のファミレスが色々あるが，当時はHaward Johonsonの独占状態であった。

New York州の首都のあるAlbanyを通過する頃までは元気一杯であったが，昼食を済ませてからは満腹状態と高速道路からの眺めも見慣れてしまい，そこからBuffaloまではまだかまだかと忍の一字のドライブであった。Motelに到着した時は既に日没だったから，ナイアガラ滝の見物は翌日の楽しみにした。

翌日，Motelに併設されているCafeでの朝食を素早く済ませて，ナイアガラの滝に向かった。アメリカ側の滝をまずみて，カナダ側の滝を見た。轟音（ごうおん）を伴い流れ落ちる水量の多さがど肝を抜いた。この水は一体どこから来てどこに行くのか！Canada Ontario州の山々の雪を源流とし，スペリオル湖，ミシガン湖，ヒューロン湖，エリー湖





を経て五大湖の最後となるオンタリオ湖に流れ落ちセント・ローレンス川を東に流れ，Montreal，Quebec を経由してはるか大西洋に流れ込む。大自然の水の還流の現場を垣間見ていたのである。

水の落ちる先ははるか下で，白く渦巻き滔々と流れて行く。その先に小舟が見える。小舟で水の落ちる滝口に近づく観光船である。Maid of the Mist と名付けられていたその小舟にも乗ってみた。滝口に近づくとすごい水滴にみまわれるのでフード付きの黒い雨ガッパを着るのだが，二人にはそのサイズが大きくて，袖から手は出ないし，裾は引きずるような状態で，まるでペンギン状態で，互いに笑いあった記憶がある。落ちる水からはかなりの距離があったのだが，真上から水が落ちてくる感じで怖かった。

船から上がり，対岸の Canada 側に建っている Skylon Tower に上がってみようということで，川をまたぐ Rainbow Bridge を渡った。橋の中央が国境線となっていて，渡れば Canada であった。米国が初めての外国であったから，2 番目に訪れることになった外国である。心が躍ったが，何のことは無かった。同じ英語を話し，UD $ で買い物をした。Tower からは二つの滝が俯瞰された。二つの滝はエリー湖からオンタリオ湖をつなぐナイアガラ川の中の小島である Goat Island で別れているもので同じ川の水の滝であることが確認出来た。Horseshoe Falls と呼ばれている Canada 側の滝の馬てい形の中央部から舞い上がるものは飛沫というより水雲であった。

瀧見物を終え，せっかく Canada に来たのだということで，Toronto に向かった。オンタリオ湖の北西を回って約 2 時間であった。美しい市庁舎，公園等を見て，「そろそろ帰るか」と家内に言った時は午後 4 時を回っていた。今，先に提示したロードマップによると帰宅には所要時間をみてみると 11 時間 29 分かかることになっているが，当時はそんな想定もしないままに走り始めた。しばらくはオンタリオ湖を右手に見ながらのドライブを楽しんだが，アメリカに戻るオンタリオ湖の東北の角に来た頃にはすっかり暗闇となっていた。道なりに誘導されアメリカに入国することになるのだが，今の日本の速度道路の料金所をちょっとばかり立派にしたような建物が入国検査場であった。そこに入る前の看板であったか，入国審査官の言葉であったか記憶が確かでないが「Welcome to New York」を目にしたか聞いたかで，Welcome to USA でなかったことから，なんとなく帰って来たなという気持ちで入国後遅い夕食をとりドライブを続けた。そこからが永かった。Syracuse を過ぎた頃には 24 時が近かった。その時点で帰宅を諦めて宿をとればよかったものの，NY に帰ってきているではないかという気持ちが続いていた。で，真夜中の Highway を走り続けるのだが，眠気が襲ってきて目をしばたてながら，前後にほとんど車が走っていないことをいい事に，車線を区分する白線をまたいで運転した。Highway Patrol に見つかれば罰金物だったろうが，夜中の Patrol は少なかったのだろうか，その気配はなかった。しかし，襲ってくる眠気には勝てず，Albany 近くの Rest Area で仮眠を取らざるを得なかった。

後日，会社で旅の話をした際，「そもそも 1 泊 2 日という旅程が無理だ，アメリカの広さがわかっていない」と先輩から叱責された。

家内が来て，1 年が過ぎた頃，69 年 7 月 20 日にアポロ 11 号による人類初の月面着陸が TV で実況された。月面に降りたアームストロングが発した言葉

That's one small step for a man, one giant leap for mankind.

(一人の人間にとっては小さな一歩だが，人類にとっては大きな飛躍である。)

に，米国人の言葉使いのうまさに家内と共に感激し心が震えた。米国市民のその大興奮は，LIFE 誌が特集号を出していることでもわかり，今それをみるとありありと思い出す。ちなみに，当時の LIFE 誌の値段は 40 CENT であったが，特集号の値

段は＄1.50であった。

ノブレス・オブリージュ（貴族の義務）という言葉があるが，米国ではそれはセレブのチャリティーということになるのだろうか。どういう経緯で繋がったのか，記憶がないが，家内が，現地の富裕層の婦人がグループを作り米国に来た外国人の婦人を対象に現地事情を紹介しながら英会話を習得させるという交流会のようなものに参加していた。交流会というものの，one to oneの関係が中心であった。家内の担当となった夫人は，文化に秀でていて，リンカーン・センターのバックステージツアーを紹介してくれていたりしていたが，夏を前にして，Tanglewoodの音楽祭に行ってみることを勧めてくれた。それはBostonを本拠地とするボストン交響楽団等が夏の期間，Massachusetts州東部のBostonから約140マイル（220km）離れた州西部の小都市Lenoxで開催している言わば避暑地での音楽祭だった。その話を聞き，地図を広げて確認してみると，遠くではなかった。前年のナイアガラの滝の旅行から判断すれば，日帰りも可能だったが，今回も1泊2日の旅を計画した。今では，その後に小沢征爾が1973年から2002年までBoston交響楽団の音楽監督になり，この音楽祭にもおおいに関わったから，とても有名になり，NY観光に出かける日本人向けのバスツアー等もネットで検索出来る。

直線距離で行くなら，コネチカット州の西端を南北に走るRoute7番というローカル道路を行くのだが，4時間もあれば到着できそうであったから，往路はチョット遠回りになるがＮＹ州の東部のTaconic State Parkwayを走って北上した。このParkwayというのは，その名が示すように公園の中の道路のごとく見事な緑に囲まれた高速道路でトラック等の大型商業車の通行は禁止されていたから，ドライブはとても快適であった。

ゆっくり出かけた一日目は現地到着後に音楽祭の会場周辺を散策し，町の案内所で宿泊先を紹介してもらった。小さな町で，観光のPeak Seasonに対応するほどのHotelやMotelが常設されているわけでなかったから，音楽祭の開催される時期だけに客を受け入れる民宿が案内所に多数登録されていた。紹介されて訪れた先は正に普通の民家で，老夫婦が笑顔で迎えてくれた。夕食はついていなかったが，朝食はクロワッサンにサニーサイドアップの卵，オレンジジュース，ミルク，コーフィーで正にアメリカン・ブレックファーストであった。

老夫婦は先に朝食を済ませていて，我ら二人が食する間，そばのソファーから笑顔を送ってくれていた。彼らとの会話の中で，思い出すのは「あなたたち　学生なの？」だ。私も家内も30歳であったのだが，小柄な東洋人は彼らにはそのように見えたのかもしれない。

当日のコンサートは午後からだったが，午前中に無料の公開リハーサルがあったので，出かけてみた。ベートーヴェンの交響曲7番を時々止めて指揮者が何か団員に話していたが，なんとその指揮者はEugene Ormandyであった。彼は，当時はPhiladelphia交響楽団の音楽監督であり，Boston交響楽団の音楽監督はErich Leinsdorfであったから，客演であったのだろう。曲は聴き慣れていたから，なんだかホイキタホイでやっているようで，親近感を抱いた記憶が残っている。

演奏会場は扇状に広がる野外劇場で要に当たるはところに屋根のある舞台と椅子席があり放射状に広がる扇の主要部分は見事な芝生となっていて，そこでは，持ち込んだワインを飲みオードブルを食しながら，ピクニック椅子から足を投げ出

したり，寝そべったりしながら演奏を聴くというものだった。日本でも最近は野外でのロックコンサートが盛んでそれは興奮と喧騒（けんそう）の中でのコンサートだと聞くが，それと対比すれば，演目がクラシックであるということもあるが，のどかでゆっくりと時間のながれるものだった。

家内を呼び寄せてからの生活は，１年間の単身での生活経験だけでは万全の経験を済ませたとは言えず，色んな事にやはり戸惑うことが多かった。それを面白がって乗り越えたのは若かったからだと思う。大仕事は，初めての出産だった。それまでに日本で一度流産していたから，異国での出産は大いに緊張したものだ。今なら飛行機代も安くなっていて日本から母親に来てもらってということも多いいようだが，当時は考えられもしないことだった。　妊娠してからの定期健診には初めのうちは，妻が一人で行っていたが，夫婦揃って来ているのが　普通のことで，周りからは今で言うシングマザーかと思われている気配を感じると妻が漏らした。で，〈そりゃそうだ〉とその後は同行した。産婦人科医院に男が出かけることなぞ当時の日本では考えもしなかったから，大いに緊張したが，予約制で前後の予約者と顔を合わすだけで，彼らも夫婦であったから，当初の緊張は言わば一瞬であった。

出産日までに何回行っただろうか，記憶が薄れているが，医院といってもそこは診察だけで，実際の出産は病院にその医師が出向いて対応するというものであった。

それで，出産だが陣痛を確認したらその旨電話しろということであったから，家内が痛みを訴えたので慌てて電話したら「痛みが現れる周期を測れ」という指示で，その周期が何分であったかは失念したが，その周期になるまでの間に痛みを訴える家内とお医者の指示に従わねばという思いとの間で部屋の中を歩き回ったものだ。

言われていた周期になったと思われドクターに電話したら，〈では来い〉ということで指定されていた病院に駆け付けたら，病院の入り口からあっと言う間に家内は車椅子に載せられ，病室でみぐるみ剝がされ，剝がされた下着を含む衣服の一切を紙袋に入れたものを渡されて〈自宅で待て〉と帰された。

自宅で誕生の連絡の電話を待つ間，色んな思いが駆け巡った。日本で一度流産の経験があり，今回も妊娠期間中に軽い出血があったから，何かの障害のある子が生まれたらとの懸念がわいてきた。英語でそれはどう受け答えするのか。急いで和英辞典を開いた。〈deformity〉という単語が出てきた。

ドクターからが電話が来たとき，すかさず聞いた〈No deformity?〉ドクターは一瞬間をおいて〈You have a nice boy! と〉答えた。一瞬の間は，なにを聞かれたのか分からなかったのだろう。deformity（奇形）なんて言葉を流暢（りゅうちょう）な英会話が出来ない外国人が使ったからであったとその後に解釈している。

病院に駆け付けると，家内はベッドでグッタリとしていた。生まれた子供は新生児室で小さな箱に入れられていて，それを窓越しに見た。その日や前日に生まれた新生児の箱がずらりと並んでいたが，黒い頭髪のあるのは我が子だけであったからすぐ分かった。

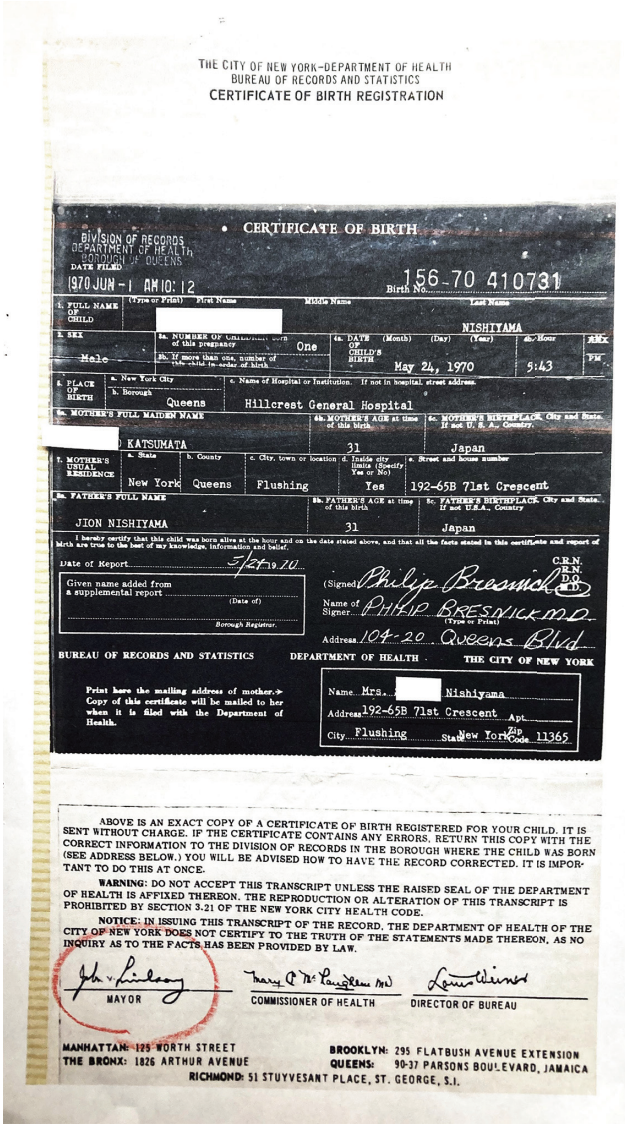
驚いたのは，出産後の母親たちが華やかなネグリジェ姿で窓越しに我が子を見ながら談笑している姿であった。グッタリしているのは家内ぐらいなもので，米国人の母親は元気なもので，シャワーを済ませて窓越しに新生児がみられる廊下でのネグリジェ姿のファッションショウであった。

生まれた子供の国籍だが，米国は生地主義で，日本は父母両系血統主義をとるから，二重国籍となった。それぞれの届出をどの様にしたのか，全く記憶していないが，今でも手元に米国での出生を示すBirth Certificateが残っている。市長であったJohn V. Lindsayの署名が左下にある。Lindsayはその後1972年の大統領選に民主党候補として党の指名争いに名乗りを上げた。ベトナム戦争に反対する若者たちの激しい動きがあった時で注目されたが，早い段階で撤退し民主党はマッガーバーンが指名され，共和党のNixonと争い，Nixonが再選された大統領選であった。Lindsayが勝ち残っていたら，記念すべき書類になったのだが，と思う。

その後の話になるが，3歳になった息子を連れて帰国するとき，息子には米国のPassportも用意した。で，それから約6年後再度NYに家族で赴任する際，米国のVISA取得申請で領事館を訪ねたら，息子にはVISAは出せないと言われて慌てたが，それは米国籍のある者にVISAを出すと

いうことはあり得ないではないかというもので，なんのことはない，失効していた米国Passportの再発行となった。そんなことで，その時の，米国入国では親はVISAによる外国人の入国，息子は米国人の帰国という扱いであった。

さて，話がそれたが，誕生後のことで，今思い出すことは，おむつ，夜泣き，離乳食がある。おむつは今なら紙おむつが完備されているが，当時はそれが無かったのか，布おむつのレンタルサービスを利用した。週に2回位であったかそんな間隔での集配があり，使用後のおむつは水洗便器の水流で洗い専用の容器に入れて保管し，次回の集配で回収されていた。Baby Bedは夫婦のベッドルームに置いていたから，夜泣きには閉口した。なにしろ初めての子育てだから，何故泣くのかさっぱり分からない。家内は神経衰弱気味になるし，私は睡眠不足から勤務中に睡魔が襲ってきたものだ。離乳食は完備されていて，幼児の成長段階に合わせて，1回ごとの使用になるように小さな瓶詰で，スーパーマーケットで販売されていた。幼児の顔写真のあるラベルが貼ってあったGerberというその商品名は今でもシッカリ記憶に残っている。



THE CITY OF NEW YORK-DEPARTMENT OF HEALTH
BUREAU OF RECORDS AND STATISTICS
CERTIFICATE OF BIRTH REGISTRATION

CERTIFICATE OF BIRTH

DIVISION OF RECORDS DEPARTMENT OF HEALTH BOROUGH OF QUEENS DATE FILED 1970 JUN -1 AM 10:12

Birth No. 156-70 410731

1. FULL NAME OF CHILD (Type or Print) First Name [redacted] Middle Name Last Name NISHIYAMA
2. SEX Male
3a. NUMBER OF CHILDREN born of this pregnancy One
3b. If more than one, number of the child in order of birth
4a. DATE OF CHILD'S BIRTH (Month) (Day) (Year) May 24, 1970
4b. Hour 5:43 AM PM
5. PLACE OF BIRTH a. New York City b. Borough Queens c. Name of Hospital or Institution. If not in hospital, street address. Hillcrest General Hospital
6a. MOTHER'S FULL MAIDEN NAME [redacted] KATSUMATA
6b. MOTHER'S AGE at time of this birth 31
6c. MOTHER'S BIRTHPLACE. City and State. If not U. S. A., Country. Japan
7. MOTHER'S USUAL RESIDENCE a. State New York b. County Queens c. City, town or location Flushing d. Inside city limits (Specify Yes or No) Yes e. Street and house number 192-65B 71st Crescent
8a. FATHER'S FULL NAME JION NISHIYAMA
8b. FATHER'S AGE at time of this birth 31
8c. FATHER'S BIRTHPLACE. City and State. If not U.S.A., Country Japan

I hereby certify that this child was born alive at the place and on the date stated above, and that all the facts stated in this certificate and report of birth are true to the best of my knowledge, information and belief.

Date of Report 5/27 19 70

Given name added from a supplemental report ..... (Date of) ..... Borough Registrar.

(Signed) Philip Bresnick C.R.N. R.N. D.O. M.D.
Name of Signer PHILIP BRESNICK M.D. (Type or Print)
Address 104-20 Queens Blvd

BUREAU OF RECORDS AND STATISTICS DEPARTMENT OF HEALTH THE CITY OF NEW YORK

Print here the mailing address of mother. Copy of this certificate will be mailed to her when it is filed with the Department of Health.

Name Mrs. [redacted] Nishiyama
Address 192-65B 71st Crescent Apt.
City Flushing State New York Zip Code 11365

ABOVE IS AN EXACT COPY OF A CERTIFICATE OF BIRTH REGISTERED FOR YOUR CHILD. IT IS SENT WITHOUT CHARGE. IF THE CERTIFICATE CONTAINS ANY ERRORS, RETURN THIS COPY WITH THE CORRECT INFORMATION TO THE DIVISION OF RECORDS IN THE BOROUGH WHERE THE CHILD WAS BORN (SEE ADDRESS BELOW.) YOU WILL BE ADVISED HOW TO HAVE THE RECORD CORRECTED. IT IS IMPORTANT TO DO THIS AT ONCE.

WARNING: DO NOT ACCEPT THIS TRANSCRIPT UNLESS THE RAISED SEAL OF THE DEPARTMENT OF HEALTH IS AFFIXED THEREON. THE REPRODUCTION OR ALTERATION OF THIS TRANSCRIPT IS PROHIBITED BY SECTION 3.21 OF THE NEW YORK CITY HEALTH CODE.

NOTICE: IN ISSUING THIS TRANSCRIPT OF THE RECORD, THE DEPARTMENT OF HEALTH OF THE CITY OF NEW YORK DOES NOT CERTIFY TO THE TRUTH OF THE STATEMENTS MADE THEREON, AS NO INQUIRY AS TO THE FACTS HAS BEEN PROVIDED BY LAW.

John V. Lindsay — MAYOR
Mary C. McCauley M.D. — COMMISSIONER OF HEALTH
Louis Weiner — DIRECTOR OF BUREAU

MANHATTAN: 125 WORTH STREET
THE BRONX: 1826 ARTHUR AVENUE
BROOKLYN: 295 FLATBUSH AVENUE EXTENSION
QUEENS: 90-37 PARSONS BOULEVARD, JAMAICA
RICHMOND: 51 STUYVESANT PLACE, ST. GEORGE, S.I.